

著：斎田俊明

皮膚病理組織診断学入門 改訂第2版

書評者：檜垣祐子(東京女子医科大学附属女性生涯健康センター副所長・皮膚科教授)

皮膚病理組織診断で困ったとき、1冊の本で解決しないかと、まず手に取るのが本書初版でした。診断するうえで、鍵となることが記載されていて、なおかつ非常に効率的、合理的に構成されているからです。

皮膚科医になって20年余になります。皮膚疾患の中で、腫瘍については随分勉強をおろそかにしてきたので、告白するといまだに診断がよくわからないことが多いのですが、そんな私にとって、本書初版の使いやすいいところは以下の点です。

① スリムなボディと扱いやすさ：本書は厚さが17 mmです。非力な女性でも片手でヒョイと持ち上げて、机の上でも膝の上でも簡単にページをめくれます。

② 辞書感覚で目的の疾患が見つかる：疾患がアルファベット順に配列されているので、辞書を引くような感覚で目的の疾患のページをすぐに開くことができます。疾患が見つからないときだけ、索引を利用すればよい仕組みです。

③ 厳選された疾患のみ掲載されている：皮膚病理組織学を勉強するうえで、基本となる肝心な疾患のみ記載されたコンパクトさがなんといいながらもありがたい本です。1つの疾患について、標本か

ら本書へと何回か繰り返し確認することで、その疾患の特徴が整理され、確実に診断能力が向上します。

④ 1疾患、1ページの原則：皮膚病理組織所見について、重要なポイント、エッセンスが、どの疾患も1ページに収まる範囲で書かれています。Epidermal cystもmolluscum contagiosumも1ページを占めるなら、なんとSCCも1ページに収まっているなんて、苦手な者にとってはありがたいことです(ちなみにメラノーマと色素性母斑は各々2ページですが、斎田先生が、ここはそれでも削りに削って、やっと2ページに凝縮されたのであろう、と想像します)。

さらに本書は「入門」とついていますが、皮膚病理の初心者はもとより、知識の整理をしたい人や、私のように、苦手分野を何とかしようという者には、とても使いやすいガイドになるものと思います。

さて、このように本書初版を愛用していたところ、このたび(もう!)第2版が出版されたというではありませんか。第2版を手にとってみると、ページ数が40ページ余り増えているのにもかかわらず、厚さは18 mmです。疾患

の数は150疾患となり、初版の112疾患から40ほど増えています。約40疾患増えて、40ページ増加ということは、各疾患1ページという原則は、第2版でも踏襲されていることがすぐにわかります。Epidermal cystも1ページ、SCCも1ページのままです。ただし、SCCとBCCのリスク分類など、新しいトピックスがAdvanced Memoとして加えられて、本書は一段と進化し、かつ深化したものと思えます。

さあ、これからは初版を第2版に持ち代えて、研修医から教授まで、皮膚病理診断に大いに役立てようではありませんか。

でも、ちょっと待って。初版のわずかな余白に貼って、めくれるようにした付箋の書き込み、エッセンス中のエッセンスに引いたアンダーラインやマーカーの数々……ああ、これらを第2版にすべて書き写すことになるのでしょうか!?

● 四六倍判 頁262 2009年
定価 16,800円
(本体 16,000円+税5%)
[ISBN 978-4-524-24233-7]
南江堂刊